



唄う男 1932

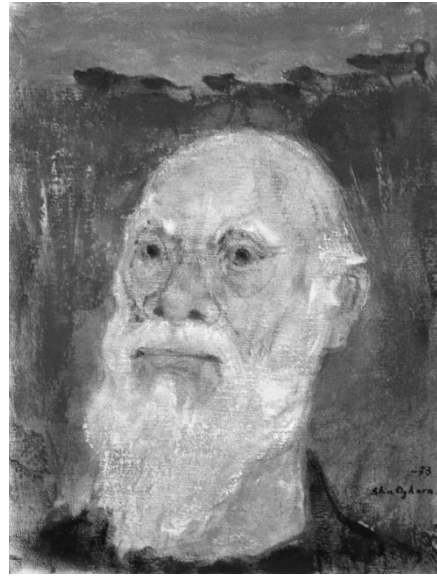
「あの頃はいい絵を描いていたんだな」

88歳を越えた小川原脩がつぶやくように言ったとき、目の前にあったのが『唄う男』だった。

漆黒の画面の中に、スポットライトを浴び、クローズアップされた顔が浮かび上がる。静かに息を吸い込み、腹の中から声を絞り出す男の様子が描かれている。

“美校カラー”にじっくりないものを感じ始めた小川原、制作上の悩みが学年を追って増してくる。この自画像に託したものは、確かな『未来』だったのだろうか。

美術学校4年、22歳の頃の作品である。



老人と犬 1973

1973年頃の小川原脩の主な作品は「群化社会」に代表されるような、無数の野犬たちが描かれていた。ところが、この作品では背後に群れとなって駆けてゆく犬たちが描かれているものの、中心は人物の肖像である。見事な白髪の髭に、大きな目鼻立ちの老人。真一文字に結ばれた口。眉を持ち上げ目を見開き何かを凝視している。

この老人像には、実在のモデルがいる。小川原自身は誰かということは語っていないが、麓彩会の画家たちは「貫太郎さん」という。

「貫太郎さん」こと笹谷貫太郎(1901-1978)氏は、岩内で親しまれた絵描きのひとり。小川原とのつながりというと、1966年の第8回麓彩会展から10年間ほど出品を続けていた。明らかに同一人物と思われる作品は他に3点あり、いずれも「老人と犬」という題が付けられている。なぜ、小川原は笹谷氏を描いたのか。画家の鋭い眼光は老いることなく、小川原自身の視線も重ねたかのようだ。



祈る女 1983

薄く目を閉じた女性が合掌している。その頭上には細長い布の束がはためき、なにか文字のようなものが浮かび上がっている。これはチベットで使われている文字で“オム マニペネフム”と読み、訳は様々あるが「嗚呼、蓮華の中の宝珠よ永遠なれ」という意味の祈りの言葉なのだという。

布の束は何を描いたものなのだろう。小川原脩の遺した蔵書資料を調べていると、1冊の写真集の中に、この布の束はあった。チベットの中心都市ラサに架かる「神様の渡る橋」に、祈りを捧げるためのおびたしい数の布が縛り付けられていた。

1981年、82年とチベットのラサを旅した小川原は、祈りの布をなびかせる風を直に感じたことだろう。それまで強く意識したことのない「信仰とは何か」という新たな思いを抱きながら帰国した。

小川原 脩 (1911-2002)



撮影：佐藤雅英

降りしきる雪の中、自宅前にて (1989年・冬)



無題 1972

自画像と言われている作品だが…2つの顔が並び、表情にはわずかな違い、組まれた手はいったい何を意味するのか。



馬 1963

「どうだい、本田君（彫刻家・本田明二氏）に似ているだろう」と作家仲間に話していた。

表紙の作品：無題 1975

こちらのガイドのお持ち帰りには、チケットホルダ(¥200)をどうぞ。
ぴったりにおさめます。
ぜひ受付ショップへお立ち寄りください♪



小川原脩記念美術館
Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006 北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1
TEL 0136-21-4141 / FAX 0136-21-4142
<http://www.townkutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/>

Shu Ogawara

Shu Ogawara Exhibition



小川原 脩のまなざし 顔

‘Faces’

2015.12.19 SAT → 2016.2.14 SUN

展覧会ガイド

自画像や人物画、ユニークな表情を見せる馬や犬など動物たちなど、顔を題材とした作品を展示しました。小川原が描いたさまざまな「顔」を、どうぞお楽しみください。